

むかし、ある村に、親孝行な息子が、母親とふたりで暮らしていました。息子は、毎日、山で木を切っては町に売りに行きました。帰りには、いつも、母親に、町のめずらしい物やおいしいものを買って来ました。

ある年の暮れ、息子は、薪を背負って山を下りながら、ひとりごとをいいました。

「ぼったりぼったりつくもちは、わしは食いとはなけれども、母にひとつは食わしたい」
 するとどこかで、

「ぼったりぼったりつくもちは、わしは食いとはなけれども、母にひとつは食わしたい」と、口まねをする者がいました。こんな山の中でふしぎなことだと、あたりを見まわすと、道ばたに、石のお地藏さまがすわっていました。もしかしたら、このお地藏さまじやなかるうかと思って、息子は、また、

「ぼったりぼったりつくもちは、わしは食いとはなけれども、母にひとつは食わしたい」といつてみました。すると、お地藏さまが口を開いて、

「ぼったりぼったりつくもちは、わしは食いとはなけれども、母にひとつは食わしたい」といいました。息子は、

「やあ、これは、神さまのお助けにちがいない」といつて、お地藏さまを背負って、そのまま町へ行きました。そして、

「地藏にもものいわせ。地藏にもものいわせ」といつて歩きました。

町の人たちは、初めのうちは、だれも相手にしませんでしたが、やがて、ひとりの人が、

「ひとつ、ものいわせてみる」といいました。息子が、みんなの見ている前で、

「地藏、ものいえ」というと、お地藏さまは、

「ぼったりぼったりつくもちは、わしは食いとはなけれども、母にひとつは食わしたい」といいました。町の人たちは、おもしろがって、お金を投げてくれました。孝行息子とものをいうお地藏さまは、町じゅうの評判になりました。

その話が、お殿さまの耳にも入りました。お殿さまは、息子をよび出して、

「地藏にもものいわせてみい」といいました。息子が、

「地藏、ものいえ」というと、お地藏さまは、

「ぼったりぼったりつくもちは、わしは食いとはなけれども、母にひとつは食わしたい」といいました。お殿さまは感心して、ほうびにたくさん的小判をくれました。

この話を、となりの欲深じいさんが聞きました。じいさんは、息子の家に来て、
 「ちよつとそのお地藏さまを貸してくれないか」といいました。そして、お地藏さまを背負って町に行きました。ところが、じいさんが「地藏ものいえ」といつても、お地藏さまは、うんともすんともいいません。町の人たちは、笑って行ってしまいました。じいさんは、腹を立てて、家に帰って来るなり、お地藏さまを、こごこちにわってしまいました。

あくる日、息子がお地藏さまをむかえに行くと、となりのじいさんは、

「いくらものいえといっても、うんともすんともいわんから、そこに、こここちにしてある」といいました。息子は、

「なんと、もったいないことをする」といって、お地藏さまのかけらを集めて持つて帰りました。そして、庭に埋めておまつりしました。すると、そこから、竹が生えて来ました。竹は、どんどんのびて、天にとどぎました。ゆすつてみると、小判が雨のようにふつて来ました。

となりのじいさんが、それを見てやつて来ました。

「おれにもゆすらせてくれ」

となりのじいさんが竹をゆすると、馬のふんが、ぴちやぴちやふつて来ましたとき。おしまい

原話…『旅と伝説151-9』

再話…村上郁